

メルヴィルの『レッドバーン』と「野蛮な アイルランド人」という句をめぐる (II)

A Consideration of Melville's *Redburn*
and Its Only-Once-Used Phrase “wild Irish” (II)

福 士 久 夫

要 旨

本稿は、メルヴィルの第4作『レッドバーン』に一度だけあらわれる「野蛮なアイルランド人 (wild Irish)」という句の起源や来歴を求めて筆者がたどりついた、「野蛮なアイルランド人」という表現ないし類似の表現があらわれる諸文献及び諸関連文献を繙いて、玩味し学ぶ試みである。また、そのことを通じて、メルヴィルの『レッドバーン』という物語テキストを、メルヴィルが意図したかもしれないアイロニーや込めたかもしれないひそやかなニュアンスを読み取ることを可能にしてくれるかもしれない、筆者がまだ気がついていない類の「歴史的連想」(メルヴィル) やアルージョンやコンテキストやアングルなどを発見しようとする試みである。

キーワード

アイルランド人表象、メルヴィル、「野蛮なアイルランド人」、『レッドバーン』

本稿は「メルヴィルの『レッドバーン』と「野蛮なアイルランド人」という句をめぐる (I)」(以下において、「(I)」と略記し、本稿自体は「(II)」と略記する) の続篇であり、「(I)」の最終節12を承けて第13節から始まる。

をいくつか取り上げて検討する予定であったが、本稿（「II」）を書き始めるに際して、「I」を読み返してみても、意が尽くされているとは言い難い箇所をいくつか目にし、また、遺憾ながら、明白な誤記を含む箇所も発見したので、本節はこれらの箇所についての修正、補足、訂正に充てることにしたい。

先ず前者については、「I」の1の以下の箇所——「この発言を離れても、「8歳のとき以来」（Melville 1969, 57）海に出て働いたという彼〔船乗りのジャクソン〕自身の言から、彼は底辺層の家庭の出であることを窺い知ることができるから、彼がアンドルー・ジャクソンが生きた時代（1767-1845）のアメリカで一般に底辺層を構成していたアイルランド人移民の家の出である可能性は否定しきれない」（5）——に限定して、一定の修正ないし補足をほどこしておきたい。

この一節は、ウィリアム・フォーブズ・アダムズの著書（1932）の第7章「移住の果実」、ジェイムズ・G・レイバーンの著書（1962）の第12章「移民」、カービー・A・ミラーの著書（1985）の第5章「自由、不寛容、利益——アイルランド人の移民、1815-1844」、第6章「〔移民〕から〔亡命〕へ——大飢饉以前のエクソダス、1815-1844」、及び第7章「〔スキパリーンの復讐〕——大飢饉とアイルランド人の移民、1845-1855」、ピーター・ウェイの著書（1993）の第3章「〔人間労働、肉体的と精神的〕」、ノエル・イグナティエフの著書（1995）の第2章「白いニグロ〔White Negroes〕と煤野郎〔Smoked Irish〕」、『世界歴史大系 アイルランド史』（2018年）の第6章をなす、齋藤英里執筆の「大飢饉と移民」、カービー・A・ミラーとポール・ワグナーによる『アイルランドからアメリカへ』（1998年）の「イントロダクション」と第2章「大飢饉」、ジュデス・A・リドナーの著書（2018）の結びをなす「彼らの多彩な遺産」などから得られる、アンドルー・ジャクソンの生きた時代に新たにアメリカにやって来たアイルランド人移民（プリ

テンやカナダ経由でアメリカに渡った移民も含む)に関する知見に基づいて筆者が導き出した、そうしたアイルランド人移民についての一定の概括像を含む一節であるが、このままではミスリーディングであると考えられる。

筆者のいう修正ないし補足は、上の引用文中のコアをなす「アンドルー・ジャクソンが生きた時代 (1765-1845) のアメリカで一般に底辺層を構成していたアイルランド人移民」という記述について、3点の修正ないし補足をほどこすことによって果たすことができる。まず「アンドルー・ジャクソンの生きた時代」の「アイルランド移民」とは、ジャクソンの生きた時代に新たにアメリカにやって来たアイルランド人移民を意味する。ちなみに、「アンドルー・ジャクソンの生きた時代 (1765-1845)」に含まれる、いわゆるアメリカ革命戦争 (1775-83年) やいわゆる1812年戦争 (1812-15年) の間には、アイルランド人のアメリカへの移民の波——「波」といえるほどの規模の移民——はみられなかったといわれていること、ジャクソンの没年の1845年はアイルランドにおけるいわゆる大飢饉 (1845-50/52年) が始まった年でもあること、そしてメルヴィルの『レッドバーン』の出版はアイルランドが「大飢饉」の禍中にあった1849年であったことも、念頭においておきたい。第2に、「底辺層」という用語について補足しておかなければならない。この用語は、『世界歴史大系 アイルランド史』の第6章「大飢饉と移民」中の一節——「移民船でのつらい航海を何とか生き延びて上陸した者は、おもにブリテンやカナダ、アメリカのどの大都市や工業地帯に流入し、スラム街に定住した。彼らは貧困と差別に苦しみながら、労働市場の底辺に組み込まれ [た]」(259, 太字による強調は福士)——にヒントを得て用いたが、ここでは、一国民の経済的階層を大雑把に下層, 中層, 上層と区分して考える場合の下層を意味している。そしてこの「下層」には、浮浪者 (vagrants), 乞食 (beggars), 救貧法の適用を受ける貧困者 (paupers) などの最下層の貧困層も含まれている。第3に、「一般に底辺層をなしてい

たアイルランド人移民」という言い回しに修正をほどこしておかなければならない。この一句は上掲の研究者たちの知見に基づいて筆者が独自に導き出した大雑把な概括像を示しているが、アンドルー・ジャクソンが生きた時代（1765-1845）に——つまり、革命戦争以前期から大飢饉が始まる1845年までのほぼ70年間に——新たにアメリカにやって来たアイルランド人移民がアメリカの地で形成したかもしれない経済階層を言い当てようとする記述としては、概括的、断定的にすぎると危惧される。それゆえ筆者としては、この時期のアイルランド移民が形成した経済的階層のうちで下層＝底辺層が一番大きな階層であったと考えられるという記述に修正しておきたい。

今にして思えば、「8歳のとき」から海に出て働いてきたという、ニューヨーク生まれのジャクソンの貧困を思わせる境遇という個別的な事例を説明するのに、上掲の研究者たちが提示している当時の新参アイルランド人移民がおかれていた境遇を物語る事例のなかに、そうしたジャクソンの事例を説明しうる事例を容易に見出しうることを指摘する論法に立って、筆者はたとえば上掲のアダムズの著書の第7章から以下を引用するだけでよかったかもしれない。「アメリカには1831年以前には絶対的貧困（absolute destitution）というものは存在しなかった。そしてヨーロッパ的基準からすれば、1850年においても絶対的貧困はほとんど存在しなかった。当時、6万8千人の外国人の貧困者（paupers）がいたが、そのうちの4千人がニューヨーク [市] に集中していた。異国人（aliens）の大多数、また全貧困者人口のうちの通例3分の1から3分の2は、アイルランド人であった。このことはニューヨークにおいて早くも1817年には真実であった。1830年以後には、[カナダの] ケベック、[カナダの] セントジョン、ボストン、そしてフィラデルフィアにおいても真実であった。アイルランド移民は一番多数だっただけではない。[救貧法に基づく] 救済を受ける人びとの全アイ

ルランド人移民数に占める割合は、他人種の移民たちの場合よりも大きかったのである」(358-59)。

今しがた引いた引用や少し上の筆者の論述において「浮浪者」, 「乞食」, 「救貧法」, 「貧困者」などのターム (コンセプト) が用いられているが、初期アメリカ共和国におけるこれらのコンセプトについては、Kristin O' Brassill-Kulfan の労作が参照されるべきであろう。本書はアイルランド人移民が初期アメリカ共和国で逢着した「移動する貧者 (the mobile poor)」(27) あるいは「貧しい放浪者 (indigent transients)」(5) としての境遇の事例も多数提示している。本書は6章からなるが、各章の章題のみを示すならば、以下のとおりである。第1章「「彼女は疑いもなく正真正銘の浮浪者だ」——法律部面における貧困と移動」、第2章「「放浪生活」——貧しい放浪者の物質的部面」、第3章「「非常に多数の人間を……まるで重罪犯のように強制移住させる」——貧者の強制移動」、第4章「「彼は自由の身だったのだから」——放浪生活、人種、解放」、第5章「「彼(女)らの不幸／災難 (Misfortunes) を処罰する」——裁量、収容、抵抗」、第6章「「コレラがもっとも致命的だったのは浮浪者階級……の間でのことだった」——移動、貧困、疾病」。

次に、後者、誤記が見出される箇所を検討するが、先ず当該箇所、「(I)」の第6節の最終段落中の箇所を、誤記の部分に強調をほどこして引く——「どうやらケルト人に対するイングランド人の「偏見」に先鞭をつけたらしいイングランド人は、ジラルドゥス・カンブレシスというラテン語名を名乗る人物らしいから、次には、スナイダーがこのイングランド人について述べている箇所を見てみるべきであろう」(17)。これら2つの「イングランド人」は、「ウェールズ人」と訂正されなければならない。ジラルドゥス・カンブレシスというラテン語名は、「ウェールズのジェラルド」の意である。そして、このジラルドゥス・カンブレシスなるウェールズ人は、

「ケルト人に対するイングランド人の「偏見」に先鞭をつけ」る働きをしたらしいラテン語の著作『*Topographia Hibernica* (アイルランドの地誌)』——筆者は本書を英訳 (*The First Version of The Topography of Ireland by Giraldus Cambrensis*, trans. by John J. O'Meara. Dundalk: Dundalooan Press (W. Tempest) Ltd., 1951) と日本語訳 (有光秀行訳『アイルランド地誌』) で読んだ——などを書いた時期に、イングランド国王 (ヘンリー二世) の王宮で官吏として仕えてはいたが、また、その『アイルランド地誌』において、「our own England」(O'Meara, 103), 「われらイングランドの民」(有光訳, 246) と書いてはいるが、「イングランド人」であったわけでも、あるいは何らかの手立てを講じて「イングランド人」になりおおせていたわけでもない。以上のとおり、「(I)」の校正段階で見落としした明白な誤記を訂正させていただく。

14

本節及び続くいくつかの節においては、「(I)」においてスナイダーを通じてみたジラルドゥス・カンブレンシスが、日本語の文献において——とはいっても、筆者が目にした限りでの話であるが——どのように扱われているかをみることにしたい。先ず最初に取り上げるのは、上の13でも触れた有光秀行訳『アイルランド地誌』(1996年)の「訳者あとがき」(297-301)である。(有光が用いているラテン語の著者名の表記は *Giraldi Cambrensis* であり、スナイダーの用いた表記 (*Giraldus Cambrensis*) と異なっていること、また、その有光によるカタカナ表記はジラルドゥス・カンブレンシス (ウエイルズのジェラルド) であり、われわれのリーダーズ英和辞典 (第3版) に依拠した表記、ジラルドゥス・カンブレンシス (ウエールズのジェラルド) と異なっていることに留意されたい。)

「訳者あとがき」から、先ず訳の底本としたテキストに言及している箇所を引く。——「本訳書の底本は、現在『地誌』を参照する際の定番となっ

ている。デイモックの編纂した版を用いた (*Giraldi Kambrensis Opera*, vol. V, ed. J. F. Dimock, London, 1867) (300)。ついでながら、訳者は「手に入りやすい文献として挙げられるペリカン・クラシックスに収められた英訳本 (*The Topography of Ireland*, tr. J. J. O'Meara, Harmondsworth, 2nd ed., 1982)」について、「筆者ギラルドゥスが数度にわたり手を加えた『地誌』の、いわば初版を訳したものである (加筆部分にはアイルランドそのものに関する情報があまりない、という理由から)」(300)と解説を加えている。

著者「ギラルドゥス・カンブレンシス (ウェイルズのジェラルド)」(297)について、有光は「ざらざらした出世欲、人を非難する際の舌鋒の鋭さといった彼のアグレッシヴな精神」(298)を指摘している。これはわれわれが「(I)」の8でみたスナイダーの指摘——ジラルドゥス・カンブレンシスは「全権力者に対して屈從的なお世辞を使うことによって、イングランド宮廷と聖職者界において、出世を勝ち取ることを主たる目標に据えていた。明らかにこの目標を果たすことを望んで、彼はアイルランド人とウェールズについてのラテン語による作品を、ケルト人についてのもっともうとましく、もっとも馬鹿げたストーリーで満たした」——と、軌を一にしていると見てよいであろう。有光はまた、「本書はアングロ・ノルマン勢力が周縁地域へ拡大しつつあった時の産物である」(299)ことを指摘したうえで、次のように書いている。「一読しておわりのように、アイルランドは驚異や奇蹟を多く産み、固有の価値を有する地域として貴重視される一方、野蛮で未開の、教化・改革をほどこされるべきものであることも強調されている。権力と知、支配・被支配と「野蛮／文明」観念の関係を考察する際にこのテキストは大きな手がかりを与えてくれるだろう」(299)。重要な指摘というべきであろう。

次に、「訳者あとがき」を離れて訳書の本文自体をみることにしたい。アイルランド人に関し、「野蛮」や「未開」などの(訳)語が用いられている

箇所を具体的にみるためである。先ず以下に2箇所を引く。「この民 [アイ
ルランド人] は未開人で、不 [ママ] 愛想である。獣のみを食べて、獣の
ように生きている。原始的な牧畜をして暮らす生活からはなれていない」
(204 [第3部第10章])。「無為の状態にのみひたり、怠惰にのみ身を委ね、働
かないことを最高の楽しみと思い、ほしいままにふるまうことをなにより
貴重と考える。／それゆえこの民は野蛮、まさに野蛮である。服装が野蛮
なばかりでなく、頭髪やひげものばし放題にして、現代の風からすればま
ったく未開である。そして彼らの慣習はどれもまったくもって野蛮なのだ」
(205 [第3部第10章])。これらの引用文中の「未開」や「野蛮」という(訳)
語は、上でみた、有光の紹介しているオマーラ (John J. O'Meara) の英訳で
はどのような語で訳されているであろうか。筆者はオマーラによる英訳を、
有光の紹介するペリカン・クラシックス版ではなく、別版——『The First
Version of the Topography of Ireland by Giraldus Cambrensis』 (Dundalk:
Dundalgan Press (W. Tempest) Ltd., 1951) ——で参照したが、その別版では、
上掲の1つ目の箇所の「この民は未開人で、不愛想である」は「They are
a wild and inhospitable people」(83) となっている。つまり有光訳の「未開」
はオマーラの英訳では「wild」となっている。上掲の2つ目の箇所の後段
部分(「／」以下)は、英訳では以下のとおりである。「This people is, then,
a barbarous people, literally barbarous. Judged according to modern ideas,
they are uncultivated, not only in the external not only in the external
appearance of their dress, but also in their flowing hair and beards. All their
habits are the habits of barbarians」(86)。つまり、日本語訳の「未開」は英
訳では「uncultivated」であり、「野蛮」は「barbarous」ないし「barbarians」
である。筆者の主たる関心は「(the) wild Irish」を想起させる「wild」の語
にあるが、「barbarous」の語は英訳の他の箇所にも見出すことができたが、
「wild」が使われているのは、筆者の見落としがないかぎり、上掲の箇所(83)

のみである。指摘しておきたい関連箇所がもう1つある。カンブレンシスは第3部第32章「キャシエル大司教の婉曲な答え」において、アイルランド人である「キャシエル大司教モーリス」の発言を引用しているが、そのなかに「わが民はひじょうに野蛮で未開で粗野に見えるが、……」（有光訳、239）というI文がみえる。これは英訳では以下のとおりである——「It is true that our people are very barbarous, uncivilized, and savage. Nevertheless…」(100)。以上からすれば、ジラルドゥス・カンブレンシスにおいて、アイルランド人を形容する言葉としての「wild」, 「uncultivated」, 「barbarous」, 「uncivilized」, 「savage」などは、基本的に「野蛮」の意味で用いられていると考えてよさそうである。

15

『世界歴史大系 アイルランド史』の第2章「ノルマンの侵攻と植民」(51-72)は田付秋子の執筆である。田付は当章の第1節「ノルマンの侵攻と植民地化」の「ウィンザ契約とその後」の項(56-58)及び「ジョン王時代のアイルランド支配」の項(59-61)において、ジェラルド・オブ・ウェールズ [=ジラルドゥス・カンブレンシス]の『アイルランド征服』を引用している。そして田付はジェラルド・オブ・ウェールズに注を付し、こう書いている——「『アイルランド地誌』で知られるウェールズの聖職者、ジェラルド・オブ・ウェールズは、[アイルランド]侵攻初期のおもだった諸侯ロバート・フィッツ・ステイーブンスの甥であり、1185年のジョン[イングランド王ヘンリー二世の次男、のちのジョン王]のアイルランド遠征に従ってアイルランドを旅し、数年後に『アイルランド征服』を書いた。侵略したアングロ・ノルマン貴族の視点で書かれ、アイルランド人への蔑視や誤解も含むが、アイルランド侵攻時のアングロ・ノルマン諸侯らの様子を同時代人が伝える第一級の史料である」(72)。『アイルランド征服』は

「アイルランド人への蔑視や誤解も含む」というくだりが注目されるが、『アイルランド地誌』も「アイルランド人への蔑視や誤解」を含んでいるとみなされうることは、われわれがこれまでスナイダーなどを通じてみてきたとおりである。

『世界歴史大系 アイルランド史』の巻末には「各章にかかわる文献」が一括して掲げられている。検討中の田付執筆の第2章については、27点の文献——すべて英語文献——が掲げられている（「付録」, 54-55）が、不思議なことに、そのなかにジェラルド・オブ・ウェールズ（ジラルドゥス・カンブレンシス）関連の文献は見当たらない。一方、リスト・アップされている文献のなかに、R. R. Davies, *Domination and Conquest: The Experience of Ireland, Scotland and Wales, 1100-1300* が含まれている。タイトルに惹かれ、筆者も読んでみたのであるが、本書はジェラルド・オブ・ウェールズ（=ジラルドゥス・カンブレンシス）に頻繁に論及し、また彼の『アイルランド征服』なども頻繁に引用している書物であることがわかった。ひょっとすると、上でみた田付のジェラルド・オブ・ウェールズについての記述はデーヴィスによっているのかもしれない。ちなみに、デーヴィスが用いているカンブレンシスの『アイルランド地誌』と『アイルランド征服』のエディションは、前者については、*The History and Topography of Ireland*, ed. J. J. O'Meara (Harmondsworth, 1966) であり、後者については、*Expugnatio Hibernica: The Conquest of Ireland*, ed. A. B. Scott and F. X. Martin (Dublin, 1978) である。一方、筆者が参照した『アイルランド地誌』の英訳エディションは前節で記したとおりであり、『アイルランド征服』についていえば、ウェブ上で参照しうる2001年の英訳版である。この英訳版のメリットは、「The Author's First Preface」, 「The Second Preface of Silvester Giraldus Cambrensis」, 「The Author's Preface to the Second Revised Edition of his History, Dedicated to John, King of England」をすべて収載していること、また読者

の理解を助ける脚注が充実していることにあると考えられる。

16

本節では、ジラルドゥス・カンブレンシスを扱っている日本語の文献の1つとして、山本正のエドモンド・スペンサーの『アイルランド現状管見』（『アイルランド（の）現状（状態）管見』は以下において適宜『管見』と略記する）を論じた「『野蛮』の改革：エドモンド・スペンサーにみるアイルランド植民地化の論理」をみる。本論文は、前節でみたように、田付秋子が第2章を担当した『世界歴史大系 アイルランド史』において続く第3章「王国への昇格と植民地化の進展」を担当した山本正が、当の第3章執筆以前に発表した論文であり、そのなかに次の一節がみえる。「もとより、アイルランド社会が「野蛮」だというのは、一二世紀のギラルドゥス・カンブレンシス以来、イングランドではおきまりの見方だったから、スペンサーにはそうしたステレオタイプに乗じたという面がある。しかし、同時にかれほど徹底的にその「野蛮」性、「後進」性を描いてみせた者がかつていない」（241）。つまり山本は、アイルランド人は「野蛮」であるとする見方の出発点をギラルドゥス・カンブレンシスにみて、彼の延長線上にスペンサーのそれをみている。スナイダーも同様の見方をしていることは、「(I)」の10でみたとおりであるが、山本はスナイダーを参照しているわけではない。

山本が本論文においてギラルドゥス・カンブレンシスを引き合いに出している箇所は上で引いた箇所のみであるが、山本はギラルドゥス・カンブレンシスに次のような注を付している。「A. B. Scott and F. X. Martin (eds. & trans.), *Expugnatio Hibernica: The Conquest of Ireland by Giraldus Cambrensis*, 1978」(243n. ⑩)。この注は要するに、ギラルドゥス・カンブレンシスの *Expugnatio Hibernica*（『アイルランドの征服』）の英訳書の特定エディションの提示でしかなく、ギラルドゥス・カンブレンシスや『アイルランドの征

服』について、何らかの具体的な説明を与えているわけではない。とまれ、ここでは、「一二世紀のギラルドゥス・カンブレンシス以来」の「アイルランド社会は「野蛮」だ」という見方が、スペンサーの生きた時代 (c. 1552-99) に「イングランドではおきまりの見方」になっていたとする (スナイダーのものでもある) 山本の指摘に注目してみよう。レイバーン (James G. Leyburn) によれば、イングランドの女王、エリザベス一世 (在位 1558-1603) は、スペンサーが『管見』を「脱稿した」年である「一五九六年」(山本 1993, 225) よりも23年も前の「1573年4月14日」に発したある「マニフェスト」において、「the wild Irish」という句を用いている (Leyburn, 329)。この事実は、今しがたみた山本の (また、スナイダーの) 指摘の妥当性を証明しているといえるであろう。こうしたエリザベス一世とスペンサーが生きた時代のイングランドの「おきまりの見方」のヴィクトリア朝期におけるあらわれを、われわれはのちに Thomas Cahill / トマス・カヒルを通じてみるであろう。ちなみに、「Anti-Irish sentiment」というウェブサイトによれば、かの鉄女宰相と謳われたマーガレット・サッチャー (Margret Thatcher 1925-2013) も、(ギラルドゥス・カンブレンシスやエドマンド・スペンサーに見られるような) 反アイルランド感情の伝統の衣鉢を継ぐ者とされていて、「You can't trust the Irish, they are all liars」という彼女の発言がその証拠として引用されている。なお、山本の本論文については、スペンサーの『管見』を論じた本邦の研究者による文献の1つとして、のちに別途詳論する。

17

次にとりあげるのは、桜井俊彰の『イングランド王国と闘った男——ジェラルド・オブ・ウェールズの時代』(2012年)である。本書は、筆者の知るかぎり、ジェラルド・オブ・ウェールズ (= ジラルドゥス・カンブレンシス) に関する日本語で書かれた唯一の単著である。本書を読むことによってわ

われわれは、これまでみてきたのとは異なる視点からのジラルドウス・カンブレンシス像を知ることができる。桜井の著書は、「ノルマンとウェールズの2つの血」(33)の混血児であるジェラルドが、イングランド王宮での官吏としての仕事を辞したあと、「ウェールズ人としてのアイデンティティ」(123)に覚醒するに至り、そしてそのウェールズ人としてのアイデンティティのもとに、壮年期の6年間を「イングランド王国と闘[う]男」として過ごしたが、この「イングランド王国と闘った男」としてのジェラルドに、また、晩年の20年ほどを「イングランド」に「隠棲」(178)して過ごし、かつては見下し軽蔑していた「土着のアングロサクソン人やケルト人(ウェールズ人、スコットランド人)と同じブリテン島の住人」(3)としての「イギリス人[a British]」との「同化」に向かって「他のノルマン人に先駆けて」「一歩踏み出した男」(3)としてのジェラルドにハイライトを当てることによって、「ジェラルドの世俗、聖職を問わない「出世欲」を強調する見方が根強く存在する」(80)風潮のなかで、ジェラルドの再評価を試みた書物であるとみなしうるであろう。ジェラルドの「出世欲」を「強調する見方」については、われわれはすでにその具体例を「(I)」でみたスナイダーや本稿「(II)」の14で見た有光の「訳者あとがき」において確認したとおりである。

さて、ここからが本節の本題であるが、それでは、桜井の著書に、本稿(『メルヴィルの『レッドバーン』と「野蛮なアイルランド人」という句をめぐって)の主要な関心、つまりケルト人(アイルランド人、ウェールズ人、スコットランド人など)についての「野蛮」言説と結びつく記述は、どの程度見出しうるであろうか。

桜井はジェラルドがウェールズ人を見下していたという趣旨の記述を何度も繰り返している。いわく——ジェラルドは「征服者ノルマンの誇り高いプライドに満ちており、被征服者のイングリッシュ(アングロサクソン人)

や自分の母方の血はさておいて、ウェールズ人を見下していました」(5)。いわく——ジェラルドは「ふだんはノルマン人、つまり征服者階級に属する人間として、被征服者のウェールズ人を見下す一方で、ウェールズの気高い王族につながる母方の血には強いプライドを抱いていました」(17)。いわく——ジェラルドは「支配者階級ノルマン人に属する者として、ブリテン島のイングリッシュやウェールズ人といった土着の人々を見下す感情を強烈に抱きます。一方で、彼は自分に流れるウェールズ王族につながる高貴な血を自慢したりします」(71-72)。いわく——「ジェラルドは、これらの著書〔「1191年に書き終えられた『ウェールズ紀行』(*The Journey Through Wales*)」と「1194年の『ウェールズ概略』(*The Description of Wales*)」(117)]の中でウェールズ人に関し、その長所や美徳について多くを書き残していますが、彼は基本的にはウェールズ人を野蛮だと見なしていました。〔略〕この2冊には彼のウェールズ人への批判や軽蔑が随所に見て取れます」(118)。また桜井は、「ジェラルドは驚いたことに」としたうえで、こう続けている。「その『ウェールズ概略』の中のある章(第八章)で、いかにすればウェールズ人を屈服させ、ウェールズを征服することができるかということをこと細かに書いています。そして、本当に、この記述の部分は後のエドワード一世がウェールズを征服(一二八四年)したとき、数多くの貴重な情報源となったのです」(118)。

次に、ジェラルドのアイランド(人)認識について、桜井はどのように記しているであろうか。桜井はこう書いている。「ジェラルドはこの2回目のアイランド行 [= 「アイランドを父王ヘンリー2世より与えられた王子ジョンに同行した[アイランド]訪問」(111-12)]から戻ってくると2つの本を書きました。『アイランド地誌』(*The Topography of Ireland*)と『アイランド征服』(*The Conquest of Ireland*)がそれで、ジェラルドはこのなかで自分の一族であるフィッツ・ジェラルド家とカルー家がいかに勇

敢にアイルランドで戦い、領地を広げていったかを誇り高く記し、他方ウィリアム・フィッツ・オードリンをはじめとしたイングランド国王側の不当な干渉を語気荒く糾弾しています。／この両者がジェラルドに同行したイングランドの王子ジョンに捧げるために書かれたという著作の形式を考えるとジェラルドは相当な度胸の持ち主であります。つまるところ、ジェラルドのアイルランド派遣は、イングランド側の目論見に反し、彼が自らのアイルランドの身内であるマーチャー [Marcher, すなわちイングランドとウェールズの国境地方である Marches に住む人びと] 一族に対し、多大な同情を抱く結果になってしまいました」(114)。この連続する2つの段落からわれわれがジェラルドのアイルランド認識について知りうることは、自身の一族による征服であれ、イングランドによるそれであれ、アイルランドの征服自体はジェラルドによって当然視されていたということであろう。

さて、上の引用の最初の段落を一読したところでは、文中の「それ」は「2つの本」(=『地誌』と『征服])を指し、「この中」の「この」も同じ2書を指す——というのも、続く段落の冒頭では「この」は「この両者」と言い換えられているからである——と、読者はたいてい考えるのではないかと思われるが、そう考えた場合読者は、『アイルランド地誌』については誤った情報を与えられることになるのではないかと筆者は危惧している。というのは、筆者が『アイルランド地誌』を読んだかぎりでは、そのなかに、桜井が「自分の一族である……語気荒く糾弾しています」とまとめているような記述は見当たらないからである。こうした記述は、上の14で見た田付秋子もジェラルドについての注において指摘しているように、『アイルランド征服』のなかに明確に見出しうる記述である。筆者もその点を前節の後段で言及した『アイルランド征服』の英訳書を一読することによって確認することができた。それゆえ、上掲引用文中の「この中で」は、「こ

れら2著のうちの後者においては」などと改められるべきなのではなかろうか。

桜井は巻末に21点の「参考文献」——18点が英語文献、3点が日本語文献——を掲げている。18点の英語文献のなかに『ウェールズ紀行』と『ウェールズ概略』の英訳書は含まれているが、不思議なことに、上でみたように桜井が論及している『アイルランド地誌』と『アイルランド征服』の英訳書は含まれていない。一方、18点の英語文献のなかには、田付秋子の参考文献の場合と同じく、ジェラルド・オブ・ウェールズ（ジラルドゥス・カンブレンシス）に頻繁に論及し、『アイルランド征服』なども頻繁に引用しているR・R・デーヴィスの著書が含まれている。

というわけで、次節では、少し寄り道をして、デーヴィスの著書を訪問することにしたい。

18

デーヴィスの『支配と征服——1100—1300年間におけるアイルランド、スコットランド、およびウェールズの経験』を訪問するといっても、特定の2箇所だけを見るにとどめなければならない。1つ目の特定箇所とは、第1章「Patterns of domination」(1-24)の末尾(20-23)の連続する4つのパラグラフであり、2つ目の箇所は、第6章「Conquest」の冒頭のパラグラフの後半部とそれに続く第2パラグラフの冒頭部分(109-110)である。前者はアイルランド人やウェールズ人などについての「野蛮」言説の形成と機能、そうした言説形成においてジラルドゥス・カンブレンシス（ジェラルド・オブ・ウェールズ）のような聖職者たちの演じた役割などを解明している点で、また後者はジラルドゥス・カンブレンシスの評価についての貴重な視角を提示している点において、筆者が大いに啓発された箇所である。しかし、史家でもない筆者がいくら啓発されたといっても、デーヴィ

その具体的な記述を示さないかぎり、本稿を読んでくださる読者からすればこころもとないと考えられるので、以下において、当該箇所を要約的に祖述しておきたい。

最初に一つ目の箇所について。

——12世紀における北ヨーロッパの文化は、他の支配的な諸文化と同様、自信に満ちていただけではなく、他の諸文化に対する態度においてしばしば道徳的にも知的にも優位に立っていた。これらの他の諸文化は、北ヨーロッパ文化の上からの目線の好奇心の場合もあれば非難でしかない場合もある態度でアプローチされカテゴライズされた。こうしたカテゴライゼーションはそれ自体1つの支配の行為であるから、それはまた支配的地位にあるエリート層の思想世界を看破するための貴重な洞察の材料ともなる。というのも、人が世界をどうみるかということ、そして特に、人が自分自身や他者との関係をどうみているかということは、人が具体的な行動を起こすときのエッセンシャルなコンテキストとなるからである。このような考え方がもっともよく当てはまるのは12世紀と13世紀のブリテン（イギリス）諸島である。ウェールズとアイルランドの、そして前2者と比べれば、ずっと低い度合でということになるが、スコットランドの文化と社会は、当代の学究や聖職者によって定められたヨーロッパの基準という秤にかけられ、絶望的なほどに不十分なレベルにあるとみなされた。その結果これらの地域の文化と社会は非難をこうむることになったが、非難は3つの問題に集中しているといってさしつかえない。第1に、これらの社会は経済的に低開発状態であり、それどころか、譴責に値するほどに遅れていた。第2に、これらの社会は政治的に未熟であった。たとえばアイルランドでは、王は他所での伯爵なみに多数存在し、公権力による一元的な統治が未確立であった。こうした事態の帰結は明白で、同時代人たちによってたやすく、相互殺戮、全般的な内輪もめ、平和の不在、法と制定法の欠落など

と特徴づけられた。第3に、これらの社会は、その社会的慣習、ならびに道徳的、性的、及び婚姻の風習に照らして、せいぜいのところ、社会的進化の初期のステージにあるとされ、最悪の場合には、アイルランド人のように、野蛮な国民とされ、クリスチャンといっても名ばかりのものでしかなく、実際には異教徒であるとされた。

——ウェールズ人とアイルランド人（そして、のちには、スコットランド内部における、ハイランダー（高地人））についてのステレオタイプ化されたイメージの創作は、支配の心性の研究において、大いに重要である。これらのイメージは、それが特徴づけようとしている社会について多くのことを語るが、同時にイメージの作り手たちの世界についても多くのことを語る。つまり、これらのイメージは、聖職界や知識界のエリート層によって創られたものではあるが、一連の国際的な基準、すなわち、許容可能な社会的、性的な道徳性、政治的機構と政治的諸関係、経済的諸構造と搾取の諸形態についての基準、さらには、衣服、食物、住居、及び定住の諸形態などについての基準が設定されつつあったヨーロッパについても語ってくれるのである。文明化した社会についてのイメージはすでに作りあげられていた。だから、この文明化社会のイメージには、それとは対照をなす低開発状態の社会、あるいは野蛮な社会のイメージが組み込まれていた。こうした諸イメージは支配を促進する働きをした。支配は、支配的なグループと従属的なグループ間の、征服者と被征服者間の差異が誇張される場合に、よりたやすく正当化され説明されるのである。ジェラルド [オブ・ウェールズ] は、ウェールズを野蛮社会 (*regio barbara*) として分類したが、彼はきっとアイルランドをそのカテゴリーに含めていたであろう。他方でイングランドは秩序だった社会 (*regio composita*) であった。こうした分類は、ジェラルドの、彼の同時代人たちの、そしてアイルランドの征服者であった彼の近親者たちの世界についても、多くのことを語ってくれる分類である。

——自身の分類や自身の優位性を強く確信する人びとは、文明化のミッション、すなわち、彼らの抱く価値観や基準——政治的、経済的、道徳的、そして教会の——を、あまり幸運に恵まれていない人びと、特に名目的にクリスチャンである人びとに紹介しなければならいとする義務感に鼓吹されていたようだ。聖職者は、もちろん、その点に関してもっとも雄弁な人びとであった。彼らは自分の行いを〔正〕義のマントで被うという職業的な習性を身につけていた。しかし彼らの考え方は俗人の同僚たちの考え方に影響を与え、また疑いもなくそれを屈折させた。だからわれわれは、支配のことを論ずるときには、以下の点を認めてかかる用意ができていなければならない。少なくとも彼らの同時代人たちにとっては、彼らが関わっていたことは、政治的秩序や経済的発展のための機会を、またウェールズやアイルランドのような社会を最新の文明化した社会に引っ張り込む機会を提供していたのだということ。それはいわゆる帝国のミッションというもののよく知られている一面ではある。しかし、だからといって、軽視したり一蹴したりすべきではない。

——最後に、遅れた社会についてのステレオタイプ化されたイメージのもう1つの側面を見ておかなければならない。こういったステレオタイプのイメージは、少なくとも歴史的な文献のなかで証拠づけられうるかぎりでは、学校で教育を受けた聖職者たちによって創作された知的な構築物である。つまり、これらのイメージは、自身の論理と道理に、また自身の規範的な価値観の普遍性と正当性にいよいよ確信を深める学究的・聖職者の社会の遺産の一部なのである。それはいよいよ独断的性格を強め、それが標榜するスタンダードからの逸脱に対していよいよ不寛容になりつつある社会集団であった。それが創作した野蛮社会のイメージは、J・L・オースティン (John Langshaw Austin) の有名なフレーズでいうなら、それ (学究的・聖職者の社会) が言葉でなしたものとごとの一部であった。人間の思考と行為

の仕方に対するそうした考え方のインパクトは過少評価されるべきではない。野蛮人のコンセプトとそれが含意した諸カテゴリーは、ウェールズが侵攻されるまでには、そしてアイルランドへの侵攻が計画されるはるか以前に、すでに所を得ていた。これらのカテゴリーとコンセプトは侵攻を正当化し、一方で次には侵攻がそれらのカテゴリーとコンセプトの正しさを確証したのである。換言するなら、支配のためのイデオロギー上の基盤はすでに作りあげられていたのである。

——上記のようにいったからといって、それは思考と行為が一本の単純な直接的な線で繋がれていると主張することにはならない。それはむしろ、われわれは支配のプロセスを全面的にみる努力をはらわなければならないと主張することである。支配は、征服の軍事的なストーリーラインを過度に強調する論者が示すよりも、はるかに精妙で、豊かに織りなされた、多面的なプロセスなのである。

次に2つ目の箇所について。

——ジェラルドは通常は自分のエゴを陶冶したり、一族の者たちを弁護し賞揚したりするのに忙しく、イングランドのヘンリー一世やエドワード一世がウェールズに対する自身の侵略行為について抱くことのあったような自己疑念におそわれて悩んだりすることはなかった。しかし、ときおり、自身の聖職者としての良心に圧倒されることがなかったわけではない。ジェラルドが『アイルランドの征服』において（デーヴィスが用いた英訳では、Bk 2. ch.33において、筆者の用いた英訳では、Bk. 2. ch. 34において）ストロングボー（Strongbow）とロバート・フィッツ・ステイーヴン（Robert fitz Stephen）を、単なる略奪者にすぎないという非難に抗して弁護したときに、彼はおそらくはアングロ・ノルマンのアイルランド侵攻に対する同時代の批判に応答していたのである。いや、実のところ、彼自身、あるとき、大量の流血とクリスチャンである国民の虐殺という代価を払ってなされた、新たな、

血まみれの土地獲得のことにいい及ばざるを得なかった。その批判は無論、聖職者の肺腑を衝く批判であった。異教徒の征服と虐殺は許容しうること、それどころか、誉むべきことであるかもしれない。しかし、クリスチャンである国民の征服となると、全くの別問題であった。

——ジェラルドは論点をかわすために、自家藁籠中の決疑論をすべて用いた。つまり彼は、『アイルランドの征服』の Bk.2, ch.6 あるいは ch.7 から明らかなように、イングランドの王たちのアイルランドに対する正当な権利を説明するために、5つの理由を持ち出した。自分の所業を正当化するために5つもの理由を持ち出す必要のある者は、明らかに、弱い立場から議論を発している。だが、ジェラルドの議論は、実際には、ウェールズ、アイルランド、そしてスコットランドにおけるアングロ・ノルマンやイングランド人の支配を正当化するために繰り返し並べ立てられてきた理論上の口実を大っぴらに反映しているのである。

19

本節及び続くいくつかの節においては、本邦の研究者によってエドモンド・スペンサーの『管見』がどのように論じられているかをみることにしたい。

スペンサーの『管見』を扱った文献として、先ず、水野真理の論文「『アイルランド状況管見』はどう読まれてきたか——ウェアから集注版まで」をみる。水野の本論文は、「はじめに」(1-2)、「I 1633年以前の手稿回覧」(2-3)、「II 1663年『管見』初版以降の反応と評価」(3-10)、「III イングランドにおけるウェア版の再販」(10-15)、「IV トッドによる校訂」(13-15)、「V 手稿からの本文校訂版」(15-18)からなっている。以下において、本稿の筆者の関心にしたがって、相当数の引用を行い、適宜コメントを付すことにする。

水野は「はじめに」において、「『管見』出版はスペンサーの没後34年のことであり、スペンサーの生前・没後を通じ、出版前には手稿の形で回覧されていた」(2)とし、「本書〔手稿としての『管見』〕は1596年に書かれたとされ、1598年に書籍出版組合 (Stationer's Company) に渡った記録はあるものの、実際には出版されることはなかった」(3)としている。水野は「I」において、「手稿での本書のタイトルは『アイルランド現状管見』*A View of the Present State of Ireland* であり、スペンサーにとっても、また初期の回覧読者にとっても、その内容が (“ Present”) 1590年代のアイルランド事情であったことがうかがわれる」(3)としている。

水野は「II」において、以下のように書いている。「『管見』の初版は1633年、アイルランドの好古家ウェア (James Ware 1594-1666) が編集、出版したもの」(3)である。「この版における本書のタイトルは『アイルランド状況管見』(*A View of the State of Ireland*) であり、スペンサーの死後34年を経て、もはや本書が時事性を失っていたことがうかがい知られる。ウェアにとっての管見は、アイルランドの起源や、イングランド人との関係の歴史を概観する書物であった。この初版の特徴は、ウェアによる好古家らしい注、誤りの訂正、省略、書き換えが多く、本来の形とはいかがたいことである」(3)。(水野によれば、このウェア版『管見』は「1971年に Da Capo Press から The English Experience シリーズの1冊としてファクシミリ版が出た」(3n.2) が、本稿の筆者が参照したのもこの版である。) 水野は続けて「それらの書き換えにおけるウェアの意図は「序文」において説明されている」(3)とし、「王党派である編集者ウェアによってさえも、本書は過激な発言と、アイルランド人に対する偏見を含む問題あるテキストと見なされてい [た]」(4)としている。「過激な発言と、アイルランド人に対する偏見を含む問題あるテキスト」という指摘に注目したい。

節をあらためて、水野論文の検討を続ける。

本書（＝ウェア版の『管見』）に対する「早い時期の反応」の1つとして、水野は、「アイルランドのカトリックの法律家ベリングズ（Richard Bellings 1613-77）が1635年頃に出したコメント」（4）を以下のように紹介している。「カトリック同盟の書記であったベリングズはスペンサーを「アイルランドに悪意を抱く者」、本書を「この王国の完全転覆を目指して立てられた破壊的な計画」、そしてその内容を「植民、立ち退き、強制移住、哀れなアイルランド先住民 [= 「先住のゲール系住民」（6）]」の分散と散住によって、アイルランド人と彼らの祖国を徹底的に破壊するための…[ママ] 罪深い計画」と強く非難している」（4）。水野はこのベリングズのコメントに以下のような解説をほどこしている。「ここで触れられている立ち退き（Displantation）、強制移住（Transplantation）については説明が必要であろう。イングランド政府はしばしば、戦争を遂行するための出費を借入し、戦後にそれを返還したり、兵士への未払いの給料を精算するため、強権を発動して土地を取用してきた。アイルランドにおいては、九年戦争 [Nine Years' War] と呼ばれるイングランド政府とアイルランド土着勢力の間の闘争において、戦争の費用の事後調達および、先住のアイルランド人の勢力弱体化を目的として、東部から西部への強制移住が用いられた。スペンサーも『管見』の後半でこの手段を提案しており、それをベリングズは非難しているのである」（4-5）。

次に水野は、「清教徒革命後、『管見』がどのように捉えられていたかを示すエピソードを紹介したい」としたうえで、以下のように書いている。長い引用になるが、有名なクロムウェルのアイルランド侵攻にかかわる情報が含まれている。「まずその背景としておさえておくべきは1641年のカトリック武装蜂起である。アイルランド北部のアルスターで、イングランド

の支配に反抗するカトリック住民によって、プロテスタント住民（その殆どはイングランドからの移住者）が多数殺された。その後、英国議会は清教徒革命と呼ばれる運動の中で1649年に国王チャールズ一世（Charles I）を死刑に処し、クロムウェル（Oliver Cromwell 1599-1658）を護国卿（Lord Protector）の地位においた。クロムウェルは1641年のアルスター武装蜂起でカトリック勢力に殺されたプロテスタントの復讐を誓い、1649年ピューリタンの軍を率いてダブリンに上陸し、多数のカトリック住民を殺戮する。反乱の首謀者は処刑、3万人以上の加担者は大陸への逃亡を余儀なくされたが、彼らの土地は没収されてイングランド政府のものとなった。また無罪となった人々も、上述したと同様な政策によって、アイルランド西部、コナハトと呼ばれるシャノン河の西側のやせた土地（クレア・ゴールウェイ・メイヨー）へと強制移住させられた。こうして空いた土地はイングランド政府の財産とされた後、政府の債権者（軍の費用を融資した人々と将校・兵士）に支払われた」（5-6）。

続けて水野は、「強制移住の被害を受けたアイルランド人は、先住のゲール系 [Gaelic] 住民だけではなく、カトリック教徒であれば、イングランド系の者もそうであった。このような強制移住の対象となった一人が、エドモンド・スペンサーの孫ウィリアム・スペンサーである」（6）と書いている。つまり、上の「清教徒革命後、『管見』がどのように捉えられていたかを示すエピソード」の主たる登場人物はエドモンドの孫ウィリアムである。ウィリアムは「[1580年にエリザベス女王治世下でアイルランド総督を務めたアーサー・グレイ卿の秘書であった] エドモンドの代からスペンサー一家に与えられていたアイルランド南部コーク州 [略] のキルコールマン城 (Kilcolman Castle) に住んでいたが、その土地はイングランド議会軍に供用されることになり、コナハトへの強制移住を命じられていた」（6）が、1657年にクロムウェルに請願書を書いて、その免除を願い出た。「その請願

書においてウィリアム・スペンサーは、自分の代でカトリックからプロテスタントに改宗したこと、および、「祖父エドモンドはアイルランド住民を文明化しようとして書いた書物 [= 『管見』] によってアイルランド住民の恨みを買ったので、孫の自分もコナハトへ移住することは危険」という二つの理由を挙げている。クロムウェルはウィリアム・スペンサーの請願を受け入れようとしたが、ダブリン政府 [ダブリンに置かれていたイングランドのアイルランド総督府政府] は決定を変えなかった」(6)。つまり、孫は祖父の書いた書物を「アイルランド住民を文明化しようとして書いた書物」として見ていたわけである。水野は結論的に、「このエピソードは、『管見』が早くからアイルランド住民の怒りを買う内容であると認識されていたことを物語っている」(6)としている。

次に水野は、「クロムウェルに触れた以上は、ミルトン (John Milton 1608-74) の『管見』理解に触れないでは済まされないだろう」(6-7)としたうえで、以下のように書いている。「ミルトンが1642年から44年ごろ、すなわちカトリックの武装蜂起の直後に『管見』を読んだことは、パーカー他 [Parker, William Riley and John T. Shawcross, “Milton’s *Commonplace Book: An Index and Notes*,” *Milton Newsletter*. 1969; 3. 3. 41-54] による『備忘録』 (*Commonplace Book*) の分析から判明している。ミルトンの理解では、『管見』はウェアの意図した歴史書ではなく、完全に実用的な統治の方策の書であった。そのことは、『備忘録』の中の「軍隊の訓練について」 (*De disciplina militari*) と題する項目の中で「戦後の兵士への糧食を考慮しておくこと。スペンサーのアイルランド対談 84ページ等」と書き込んでいたことから察せられる」(7)。

水野によれば、「アイルランド人からの [『管見』に対する] 反発」は、「スペンサーの歴史認識の不正確さにも矛先を向けた」(7)。「ゲール系住民であり彼自身クロムウェルによる土地収用の犠牲者でもあった歴史家オブ

ラハティ (Roderic O'Flaherty 1629-1718?) によるラテン語の著作『オウジジア』 (*Ogygia; seu, Rerum Hibernicarum chronologia* 1685)) のヒーリー (James Hely) による1793年の「英訳」を参照したうえで水野は、『オウジジア』の「第3部第77章「エドモンド・スペンサー氏の誤り」」の内容を以下のように紹介している。「『オールド・イングリッシュ [Old English] の一部は、イングランド人でありながら、ゲール化して家名もアイルランド風に変えてしまっている」という『管見』の登場人物アイリニーアスの発言について、それらの家系は生粋のアイルランド土着のもの、と〔オフラハティは〕指摘し、また、イングランドの法体系がノルマン・コンクエストを行った王ウィリアム (William the Conqueror) によってもたらされたもの、としたり、クラランス侯に関する取り違えを犯したり、といったイングランド中世史に関するスペンサーの誤りが取り上げられ、スペンサーは歴史家としては子供扱いされている」(8)。

水野は次に「1633年『管見』初版以降の反応と評価」を窺い知ることのできる最後の事例としてジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift 1667-1745) の『アイルランドの状況短観』と題されたパンフレットを取り上げている。水野は、本パンフレットは「1727-28年、ダブリン」で、「匿名で」出版された(9)ものであり、「タイトルから見て明らかにスペンサーの『管見』を意識しているが、対話体ではなく一人称の語り手によるもので、その内容はイングランドのアイルランド支配に対する強烈な批判」であるとしている。しかし水野によれば、本パンフレットは、「このパンフレットの直前」に、「ブラウン (John Browne) が『交易に関する時宜を得たコメント』 (*Seasonable Remarks on Trade*) においてアイルランドを豊かな土地、イングランドにとって富の源泉として描いたことが契機となって」(9) 書かれたのであり、「〔スペンサーの〕『管見』に対する明確な言及はない」(9)。水野は続けてこう書いている。「しかしその〔『アイルランドの状況短観』の〕

最終段落は次のようになっていて、[スペンサーの]『管見』の冒頭部のイギリス人ユードクサスの疑問「もしアイルランドという土地がそれほど美しくて豊かな土地ならば、どうしてそこを活用して、その野蛮な住民 [筆者が参照した集注版『管見』のテキストでは、「that salvage nation」(43)]をもっと御しやすく大人しくさせる方策がとられないのか不思議に思う」を念頭において、ブラウンとユードクサスを重ね合わせて皮肉な目を向けていることが見てとれる」(9)としている。水野が引いている「最終段落」をわれわれもそのまま引くならば、以下のとおりである。「結論。もしアイルランドが豊かで栄えた王国であるというなら、その富と繁栄には、未だ人類からは隠されている何かの原因があるはずであり、その結果もまた同様に見えないのだ。外国人がやってきてこのような矛盾を持ち出すなら、それは驚くには当たらない。が、この王国に生まれつき、ここに暮らしている人間が同じ見解を持ち出すなら、それは無知を通り越して馬鹿であるか、あらゆる名誉、良心、真実をかなぐりすてた [イギリス人への]ゴマすり野郎だというほかはない」(10)。

次に、「IV」から、いくつかの箇所を引いておきたい。「IV」の冒頭の段落で水野はこう書いている。「1805年、聖職者兼書誌学者であったトッド (Henry John Todd 1763-1845) の編集にかかる八巻本の全集 *The Works of Edmund Spenser in Eight Volumes with the Principal Illustrations of Various Commentators* が出版され、[『管見』はこの中の第8巻の297-512に収められている」(13)。「この版の最大の特徴は、ウェアの版によって流通していた従来の『管見』に加えて、4種の手稿 [略] を参照したことであり、ここで初めて、スペンサーの作品は好古家の対象から学術の対象となったとすることができる。トッドはウェアの注の一部を残しつつも、自らの注も付している」(13)。水野は次の段落で、「トッド編の版の冒頭にも先行文献を駆使した52ページにわたるスペンサーの伝記が付されている。[略] [そ

の中で] 複数の手稿に見られる、ウェアによって省略されたスペンサーの過激な発言に関しては、「あえて詳述するには及ばないと判断した」として、おおむねウェアの版に拠っていることが示され[てい]る」(13-14)と書いている。筆者は「(I)」において、スナイダーの用いた『管見』のエディションである「[the ed. of 1805, VIII]の詳細は不明である」(24)と書いたが、水野からの上の引用に照らしていえば、「the ed. of 1805, VIII」とはトッド編八巻本の全集の第8巻を指すと考えてさしつかえないであろう。

「IV」からの引用を続ける。水野は「トッド以外の編集者がウェア版に拠って『管見』を出版した事例」の1つとして、「コリア——(John Payne Collier 1789-1883)の編集による五巻本」である「1862年版全集 *The Works of Edmund Spenser*」をとりあげ、次のように書いている。「第1巻に付された長文のスペンサーの伝記において、コリア——は『管見』がスペンサーの生前に出版されなかった理由を、その強圧的な内容のためにカトリック勢力から嫌われたことは言うまでもなく、プロテスタント勢力からも受け容れられず、出版されれば自らの身を危うくしかねないと考えたスペンサー自身が出版を差し止めたのでは、と推測している」(14)。

水野は同じ「ウェア版に拠って『管見』を出版した事例」の1つとして、1809年出版の、「ロンドン大学名誉教授モーリー (Henry Morley 1829-94) 編集による三人のイングランド人によるアイルランド論集『エリザベスおよびジェームズ1世治下のアイルランド』(*Ireland under Elizabeth and James I*)」をとりあげ、こうコメントしている。「モーリーの姿勢は客観的である。彼はそのイントロダクションにおいて、スペンサーがアイルランドでの長年の滞在によってその状態を記述しながら、征服という「大問題の核心に迫っている」(get at the heart of a great question)と述べ、九年戦争[Nine Years' War]時の人肉嗜食を含む凄惨な光景をスペンサーとモリソンが共通して観察していることを指摘している」(15)。(水野によれば、スペンサーのウェア

版の『管見』とモリソン (Fynes Moryson 1566-1630) の『旅行記』(Itinerary 1600) はともにモーリー編集の上掲アイルランド論集に掲載されている。) ここで水野がモーリー経由で指摘している、スペンサー『管見』における「九年戦争時の人肉嗜食を含む凄惨な光景」の描写は注目されるが、この描写については、のちに山本正の論文を通じて具体的にみることになる。

以上で、水野の論文『「アイルランド管見」はどう読まれてきたか』の検討を終え、次に節をあらためて、今度は水野真理の翻訳『1596年、エドマンド・スペンサー氏によりユードクサスとアイリニーアスの対話の形で書かれたるアイルランドの状況管見(2)』をみることにしたい。

(本稿は、「メルヴィルの『レッドバーン』と「野蛮なアイルランド人」という句をめぐって (III)」に続く。)

付 記

本研究はJSPS 科研費JP19K00428の助成を受けたものである。また、筆者が加えていただいている中央大学人文科学研究所の「現代アメリカの言語と文化」チームの主査加藤木能文氏には資料の収集その他で大変お世話になった。記して謝意を表したい。

引用文献

[以下において、翻訳書であって、原典が英語あるいは独語で書かれたものである場合、() 内に原典名を示すが、その末尾に[非]とある場合、筆者は原典を参照していないことを示す。]

アリストテレス (山本光雄訳) 『政治学』岩波文庫、山本光雄訳、1961年。

岩井淳『ビュウリタン革命と複合国家』、世界史リブレット115、山川出版社、2010年。

ウェスト、コーネル。(村山淳彦・堀智弘・権田建二訳) 『哲学を回避するアメリカ知識人—プラグマティズムの系譜』未来社、2014年。

上野格／森ありさ／勝田俊輔編『世界歴史大系 アイルランド史』山川出版社、2018年。

大野真弓編『イギリス史 (新版)』、山川出版社、第4版、1984年。

- カヒル, トマス (森夏樹訳) 『聖者と学僧の島—文明の灯を守ったアイルランド』 青土社, 1997年。(Thomas Cahill, *How the Irish Saved Civilization: The Untold Story of Ireland's Heroic Role from the Fall of Rome to the Rise of Medieval Europe*. London: Hodder & Stoughton, 1995, 2018.)
- カンプレシス, ギラルドゥス (有光秀行訳) 『アイルランド地誌』 青土社, 1996年。
- クローウェル, トマス (蔵持不三也監訳, 伊藤綺訳) 『図説蛮族の歴史 世界史を変えた侵略者たち』 株式会社原書房, 2009年。(Thomas J. Craughwell, *How the Barbarian Invasions Shaped the Modern World: The Vikings, Vandals, Huns, Mongols, Goths, and Tartars Who Razed the Old World and Formed the New*. Fair Winds Press, 2008. [非])
- 鈴木良平 『アイルランド問題とは何か—イギリスとの闘争, そして和平へ』 丸善ライブラリー, 2000年。
- 齋藤英里 「大飢饉と移民」, 『世界歴史大系 アイルランド史』: 230-264。
- 桜井俊彰 『イングランド王国と闘った男—ジェラルド・オブ・ウェールズの時代』 吉川弘文館, 2012年。
- スマウト, T. C. (木村正俊監訳) 『スコットランド国民の歴史』, 原書房, 2010年。(T.C. Smout, *A History of the Scottish People 1500-1830*. William Collins Sons & Co Ltd, 1969. [非])
- 竹田英尚 『文明と野蛮のディスクール—異文化支配の思想史 (I) —』 ミネルヴァ書房, 2000年。
- 『キリスト教のディスクール—異文化支配の思想史 (II) —』 ミネルヴァ書房, 2000年。
- 中央大学人文科学研究所編 『ケルト復興』 中央大学出版部, 2001年。
- 飛田茂雄訳 「アメリカ合衆国憲法」, 飛田茂雄編著 『現代英米情報辞典』 研究社出版, 2000年: 1187-1238。
- 富田虎男. 「北米植民地」 『岩波講座 世界歴史16 近代世界の形成 III』, 岩波書店, 1970年: 234-292。
- 福士久夫 「メルヴィルの労働大衆」 アメ労働編集委員会編 『文学・労働・アメリカ』 南雲堂フェニックス, 2010年: 59-96。
- 「「島めぐり移動シンポジウム」と革命の主題—『マーディ再訪』」 アメ労働編集委員会編著 『アメリカ文学と革命』 英宝社, 2016年: 87-128。
- 「視点, アイロニー, コンテクスト, 歴史, そしてジャクソン—メルヴィルの『レッドバーン』を再読する」, 『人文研紀要』 (中大学人文科学研究所) 第96号, 2020年: 371-403。

- 「アイルランド／アイルランド人／アイルランド人移民とハーマン・メルヴィル」『中央大学経済研究所年報』第53号 (I), 2021年: 597-629。
- 「メルヴィルの『レッドバーン』と「野蛮なアイルランド人」という句をめぐる (I)」, 『人文研紀要』(中央大学人文科学研究所)第102号, 2022年: 1-32。
- ヘルム, ゲルハルト (関楠生訳)『ケルト人』河出書房新社, 1999年(新装新版), 1979年(初版)。(Gerhard Herm, *Die Kelten*, Econ Verlag, 1975. [非])
- 堀越智『アイルランドの反乱—白いニグロは叫ぶ』三省堂, 1970年。
- 山本正「『野蛮』の「改革」: エドモンド・スペンサーにみるアイルランド植民地化の論理」, 『史林』1993, 76(2): 218-248。
- マーシャル, P.J./G・ウィリアムズ (大久保桂子訳)『野蛮の博物誌—18世紀イギリスがみた世界』平凡社, 1989年。(P.J. Marshall and Glynder Williams, *Great Map of Mankind: British Perceptions of the World in the Age of Enlightenment*. London: J. M. Dent & Sons Ltd, 1982. [非])
- 水野眞理「翻訳『1596年, エドモンド・スペンサー氏によりユーロクサスとアイリニアスの対話の形で書かれたるアイルランドの状況管見(2)』」, 『英文学評論』, 76 (2004): 149-181. (https://doi.org/10.14989/RevEL_90_1)
- 「『アイルランド管見』はどう読まれてきたか—ウエアから集注版まで」, 『英米文学評論』90 (2018): 1-21. (https://doi.org/10.14989/RevEL_76_149)
- ミラー, カービー／ポール・ワグナー (茂木健訳)『アイルランドからアメリカへ—700万アイルランド人移民の物語』東京創元社, 1998年。(Kerby Miller and Paul Wagner, *Out of Ireland: The Story of Irish Emigration to America*, Robert Rinehart Publishers, 1994. [非])
- ローディガー, デイヴィッド・R. 『アメリカにおける白人意識の構築—労働者階級の形成と人種』(小原豊志／竹中興慈／井川真砂／落合明子訳) 明石書店, 2006年。(David R. Roediger, *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class*, Revised Edition, New York: Verso, 1991, 1999.)
- Adams, William Forbes. *Ireland and Irish Emigration to the New World from 1815 to the Famine*. Baltimore: Clearfield Company, Inc., 1993, 2004 (Originally published by Yale University Press in 1932).
- Allen, Theodore W. *The Invention of the White Race: Volume I: Racial Oppression and Social Control*. New York: Verso, 2012 (Second Edition, Introduction by Jeffrey B. Perry; First published by Verso 1994).
- . *The Invention of the White Race: Volume: The Origin of Racial Oppression in Anglo-America*. New York: Verso, 2012 (Second Edition, Introduction by Jeffrey

- B. Perry; First published by Verso 1997).
- “Anti-Irish sentiment” (https://en.wikiquote.org/wiki/Anti-Irish_sentiment).
- Bercaw, Mary K. *Melville's Sources*. Evanston, Illinois: Northwestern University Press, 1987.
- Bremer, Francis J. *John Winthrop: America's Forgotten Founding Father*. New York: Oxford University Press, 2003.
- Cahill, Thomas. *How the Irish Saved Civilization: The Untold Story of Ireland of Ireland's Heroic Role from the Fall of Rome to the Rise of Medieval Europe*. London: Hodder & Stoughton, 1995, 2018.
- Canny, Nicholas P. “The Ideology of English Colonization: From Ireland to America,” *The William and Mary Quarterly*, The Third Series, Vol. XXX, Number 1, January 1973: 575–598.
- . *The Elizabethan Conquest of Ireland: A Pattern Established 1565–1576*. Hassocks, Sussex: The Harvester Press, 1976.
- Carter II, Edward C. “A “Wild Irishman” under Every Federalist’s Bed: Naturalization in Philadelphia, 1789–1806”, *Proceedings of the American Philosophical Society*, Vol. 133, No. 2 (06/1989): 178–189. (<https://journals.psu.edu>)
- Cave, Alfred A. “Richard Hakluyt’s Savages: The Influence of 16th Century Travel Narratives on English Indian Policy in North America,” *International Social Science Review*, Volume 60, Number 1, Winter 1985: 3–24.
- Corbett, John. “Terminology and the evolution of linguistic prejudice: The conceptual domain of ‘Irishness’ in the *Historical Thesaurus of English* and the *Hansard Corpus of British Parliamentary Speeches*” (*TradTerm*, Sao Paulo, v. 37, n. 2, Janeiro/2021: 515–537). (<https://doi.org/10.11606/issn.2317-9511.v37i0p515-537>)
- Davies, R. R. *Dominion and Conquest: The experience of Ireland, Scotland and Wales 1100-1300*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- Giraldus Cambrensis. *The First Version of The Topography of Ireland*. Trans. John J. O’Meara. Dundalk: Dundalgan Press (W. Tempest) Ltd., 1951. (引用に際しての略号を O’Meara とする。)
- . *The Conquest of Ireland*, trans. Thomas Foresster and Thomas Wright. Cambridge, Ontario: In parentheses Publications, 2001. (yorku.ca/inpar/conquest_ireland.pdf)
- Grenier, John. *The First Way of War: American War Making on the Frontier, 1607–1814*. New York: Cambridge University Press, 2005.

- Hirota, Hidetaka. *Expelling the Poor: Atlantic Seaboard States and the Nineteenth-Century Origins of American Immigration Policy*. New York: Oxford University Press, 2017.
- Ignatiev, Noel. *How the Irish Became White*. New York: Routledge, 1995.
- Isenberg, Nancy. *White-Trash: The 400-Year Untold History of Class in America*. New York: Penguin Books, 2016, 2017.
- Leyburn, James G. *The Scotch Irish: A Social History*. Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1962.
- Matterson, Stephen. "Indian-Hater, Wild Man: Melville's *Confidence-Man*," *Arizona Quarterly* Vol. 52, No. 2, Summer 1996: 21-35.
- Melville, Herman. *Redburn*. Evanston and Chicago: Northwestern University Press and The Newberry Library, 1969.
- . *Typee, Omoo, Mardi*. New York: The Library of America, 1982.
- . *Redburn, White-Jacket, Moby-Dick*. New York: The Library of America, 1983.
- . *Pierre, Israel Potter, The Piazza Tales, The Confidence-Man. Uncollected Prose, Billy Budd*. New York: 1984.
- Miller, John C. *Crisis in Freedom: The Alien and Sedition Acts*. Boston: Little, Brown and Company, 1951.
- Miller, Kerby A. *Emigrants and Exiles: Ireland and the Irish Exodus to North America*. New York: Oxford University Press, 1985.
- Oberg, Michael Leroy. *Dominion & Civility: English Imperialism & Native America, 1585-1685*. Ithaca: Cornell University Press, 1999.
- O'Brassill-Kulfan, Kristin. *Vagrants and Vagabonds: Poverty and Mobility in the Early American Republic*. New York: New York University Press, 2019.
- Painter, Nell Irvin. *The History of White People*. New York: W.W. Norton & Company, 2011.
- Quinn, David Beers. *The Elizabethans and the Irish*. Ithaca, New York: Cornell University Press, 1966.
- Ridner, Judith A. *The Scots Irish of Early Pennsylvania: A Varied People*. Pennsylvania Historical Association, 2018. Proquest Ebook Central. (<http://ebookcentral.proquest.com/lib/chuouniv-ebooks/detail.action?docID=5432899>)
- Samson, John. *White Lies: Melville's Narratives of Facts*. Ithaca, New York: Cornell University Press. 1989.
- Schrag, Peter. *Not Fit for Our Society: Nativism and Immigration*. Berkeley: University of California Press, 2010.

- Snyder, Edward D. "The Wild Irish: A Study of Some English Satires against the Irish, Scots, and Welsh." *Modern Philology*, Vol. 17, No. 12 (Apr., 1920): 687-725. (<https://www.jstor.org/stable/432834>)
- Spenser, Edmund. *A View of the State of Ireland Written dialogue-wise between Eudoxus and Irenaeus By Edmund Spenser Esq. in the yeare 1596*, James Ware, ed., *The historie of Ireland, collected by three learned authors viz. Meredith Hanmer Doctor in Divinitie: Edmund Campion sometime fellow of St Johns Colledge in Oxford: and Edmund Spenser Esq. 1st pub.* Dublin, 1633. Ppt. Facs. Amsterdam & New York: Da Capo Press & Theatrum Orbis Terrarum, 1971. (引用に際しては、Wareを略号とする。)
- . *A View of the present state of Irelande. discoursed by way of a dialogue betweene Eudoxus and Irenius.* E. S. Eds. Edwin Greenlow, et al. *The Works of Edmund Spenser: A Variorum Edition.* Eds. Edwin Greenlow, et al. Vol. 10. Baltimore: John Hopkins, 1949. (引用に際しては、集注版を略号とする。)
- Way, Peter. *Common Labor: Workers and the Digging of North American Canals, 1780-1860.* Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1993.
- Webb, Jim. *Born Fighting: How the Scots-Irish Shaped America.* New York: Broadway Books, 2004, 2007.
- "WILD IRISH | Meaning & Definition for UK English | Lexico.com". (https://www.lexico.com/definition/wild_irish) (2021/12/31)
- "wild Irish, n. : Oxford English Dictionary," "Oxford English Dictionary On Line". (<https://www.oed.com/view/Entry/276244?redirectedFrom=wild+Irish#eid>)